

ウォーキング雑感 (その8)



(一社)日本機械土工協会
常務理事 保坂 益男

ガマンの足りないミミズの運命

弁天堂のある不忍池側から上野精養軒へ入る道の角に五条神社と花園稲荷神社の二神を祀っている一画があります。

私事で甚だ恐縮ですが、宗派が臨済宗妙心寺派でありまして、臨済宗大本山の京都妙心寺は1337年、95代の花園法皇の勅願によって創建され、法王の離宮を賜って建立しており、その「花園」がつく神社でないか、花園天皇に縁があるのかどうか、興味があり調べてみました。

ちなみに五條神社は第十二代景行天皇の御代、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東夷征伐の為、上野忍が岡をお通りになられた時、薬祖神（二柱）の大神に御加護を頂いた事を感謝なされて、この地に両神をおまつりなされました（約1890年前）。とあり、古い由緒のある神社でありました。

一方、花園稲荷神社は寛永のはじめ、天海僧正が寛永寺を草創のさいに、忍ヶ岡(上野公園一帯)の狐の棲み処が失われた事を哀れみ、一洞をつくり、そこに祠をたてて祀ったものといわれています。この穴稲荷(正しくは忍岡稲荷<しのぶがおかいなり>)が1873年(明治6年)に社殿などが整備され、周囲が寛永寺の花畑であったことから花園稲荷神社に改名された。とあり、花園天皇には全く関係ありませんでした。

ここの社殿の南側を動物園通用口から続く道路が通っており、道路と神社の敷地の境が高い石積みとなっております。甲州街道を歩いた時にも書きましたが、夏に向かって南に面した石垣が太陽で焼かれるため、ここも道路に点々と干からびたミミズが落ちております。

繰り返しますが二宮翁の著書(二宮翁夜話)に、地面の温度が上昇すると我慢が足りないミミズは地表に出てかえって命を落とす、と書いてあります。とガマンの大切さを教えてくれたのは、富澤老師(当協会設立時の初代理事長)であります。また神社の出入口の横に、見上げるような大きな萩が生えており、これも季節の移り変わりを感じさせてくれる一幅の風景画となります。

余談ですが、当時「旧・建専協」は、一年の順番で会長を回して、会長団体が事務局になるやり方を

取っておりました。当協会に順番が回り、当時の山崎会長に事情を説明し、形だけの会長就任をお願いしました。

会長から、「君は俺を親睦会の会長にするつもりか。」と言われてしまい、「いや現在、全国組織40もの専門団体で構成されている組織は他にありません。

文字通り専門団体を代表する連合会になりませう。」と言ってしまいました

有言実行をしなければならぬ立場になり、山崎会長と持ち回りの事務所と事務局責任者を独立させ、法人化し専門業界を代表する組織にする。事業に取り組みました。

また、朝霧にあった「旧・建設省建設大学校中央訓練所(朝霧校)」を廃止する、と所管課から説明があり、それまで資格講習や外国人研修生で長いつきあいがあったため、廃止するのはもったいない、と思い山崎会長と労働安全委員会の委員長であった向井副会長に報告しました。ご両人はこれを専門工事業界の共同教育機関にする。と決め、各方面に猛烈なアピールを開始しました。

しかし、実務的には両案件とも超えなければならぬ課題が山積し、いずれも山が高くて、先が見えない日々が続きました。山崎会長からは朝6時に電話が入ってきます。向井副会長(後の会長)は気がかりがあると朝7時。

山への昇り方も見えず、悩みに悩んで「会長の会社の前で首でも吊ってやろうかしら。」、心境に行き着きます。そこまで行き着いて出る結論は、「出来るものからやろう。」です。これで心が軽くなり、一つ一つ課題にチャレンジしている、といつの間にか前に進んでおりました。

ただ、凡人の私には前の経験が役に立たず、どちらの案件も悩みに悩んで「会長の会社の前で首でも吊ってやろうかしら。」と追い詰められて始めて同じ結論になり、そこでやっと前も「出来るものからやろう。」だった、と気づくのです。私は生き残るミミズか、干からびるミミズか。

※不忍池(しのばずのいけ) 辯天堂(べんてんどう) 一江戸初期の寛永年間に、天台宗東叡山寛永寺の開山、慈眼大師天海大僧正(1536~1643)によ

って建立されました。天海大僧正は、「見立て」という思想によって上野の山を設計していきました。天然の池であった不忍池を琵琶湖に見立て、また元々あった聖天（しょうてん）が祀られた小さな島を竹生島に見立て、さらに水谷伊勢守（みずのやいせのかみ）勝隆（かつたか）公と相談して島を大きく造成することで竹生島の「宝厳寺（ほうごんじ）」に見立てたお堂を建立したのです。琵琶湖と竹生島に見立てられたお堂であったため、当初はお堂に参詣するにも船を使用していたのですが、参詣者が増えるにともない江戸時代に橋がかけられました。



明け六つの鐘

上野公園内の、上野精養軒へ入る角に江戸時代から続いている寛永寺の「時の鐘」を突く建物が残っております。物の本によると時の鐘は1600年代に始まり、現存する鐘は1787年に造られた、とあります。時の鐘が吊るされている建屋のとなりに住居らしきものがあり、時の鐘を突く「家族」が住んでいるのでしょうか。

普段は朝5時台にウォーキングを終わることにしており、上野の山を歩いて朝6時になることはありませんので、明け六つ（朝6時）の鐘を聞くことはありません。ちなみに今でも「明け六つと暮六つ」に突いているとのこと、住んでいる住居が江戸時代の上野神吉町（おそらく幡随院跡地）、上野の山に近いとはいえ、昔ならともかく現代は騒音のため鐘の音は聞こえてきません。

土日に時間を遅らせて上野公園に入ると朝6時、明け六つの鐘が鳴りだします。当初鐘の音は六だから6回だと思っておりましたが違いました。数えてみると9回も鳴ります。どういう訳か調べてみると、最初の鐘は捨て鐘3つ、その後で6つ鐘を打って合計9回。最初の捨て鐘は突く間隔が短いようです。そういえば時代小説かなにかで読んだような気がします。納得。江戸の昔は鐘の音が聞こえる範囲内からお金を徴収していたようですが、時計の普及した今はなし、当たり前。でも今日までよく続けられたものですね。

「ガマンが足りないミミズの運命」で、課題に立ち向かっているとき、山崎元会長は朝6時（明け六つ）、向井前会長は7時に電話が鳴る、と書きましたが、平成2年に協会へ入職して、都合4回大きな課題があり、いずれも絶対絶命まで追い詰められ（自分で自分の心を追い込んでいっているのかな）、そこで気が付く結論は「できるところからやろう」、それで気が軽くなり、進めるようになる。平時には仕事での最高の責任の取り方は、「自ら職を辞すこと」と判っているのですが、なぜか戦時になり追い詰められると平常心を失う、これではいい仕事ができません。反省。

※一松尾芭蕉の句「花の雲 鐘は上野か 浅草か」



常連 挨拶 老犬

永いこと朝上野公園を歩いていると、決まった時間に決まったように散歩している人達と顔見知りになり、自然と挨拶を交わすようになります。また野宿者でも、こちらが歩く時間に歩道など掃除している人には必ず挨拶することにしています。朝早い時間であるが、散歩者のなかには犬を連れてくる人が結構多い。人もさることながら、犬どうしが顔見知りになっており、会ってもむやみに吠えたりする声を聞かない。人間同士が挨拶を交わしている間、しっぽを振ってじゃれ合っている。その中でもとくにご高齢な御夫婦がおり、御夫婦に負けにくいくらい「高齢の犬」をつれて散歩し、犬は放したままであるが、ほとんど走れない。

昨年、ある時期からおじいさんが一人で犬を連れてくるようになり、もしや、と思いましたが、その後何カ月が経ってから、おじいさんと犬から遅れること5～10分位、そのあとからおばあさんがゆっくり歩いて安心しました。手をつないで歩くいまの若い人たちと違って、前からおじいさんが先、あとからおばあさんが付いて行くスタイルでありましたが、犬とおじいさんのマイペースに付いていけなくなったおばあさん。自分の体力に合わせて歩くことでいい、それが最高の健康法。

上野公園のベンチは、ベンチの真ん中に仕切りがあり、二人が掛けられ、結果として一人ベンチで横になり寝られない作りになっている。野宿者などがベット代わりにするのを防ぐ狙いがあるのかな。最近作られた浅草の浅草寺にあるベンチの仕切りは、真ん中ではなく、一人が掛けられるよう全体の三分の一のところであり、あとの三分の二には二人が掛けられるように一段と進化した作りになっている。いずれにしてもベンチを「独り占め」できない工夫だと思う。上野公園を歩くのは夏であるので、自転車旅行をしていると思われる人や、ワイシャツ姿の人がベンチでは横になれないので、噴水の池の回りのコンクリートの上に寝ているのを見かける。歩く道路から見える公園生活者は進化して、近年ビニールシートで出来ている簡単に作れるテントを持っている。早朝にしか公園に入らない私は、「ベンチの真ん中に仕切りを付けなくてもいいように思うが」。なんだか日本人は心まで狭くなったのかな。公園は、夜から朝5時まで入ってはいけない、と告示されており、本来は公園で夜を明かすことは御法度。本来は五時前に早朝散歩する我々も建前上違反していることになる。ただし五時前に公園内をパトロールする「パトカー」や自転車の警察官と出会うことがあるが、このようなことで「違反しているぞ」と指導をするような警察官はいない。ここはいい。